

ありがとう  
そして サヨナラ

元

# 安倍晋三元總理

安倍晋三

特別寄稿

次の世代のために

櫻井よしこ

加藤康子

先崎彰容

山本皓一

百田尚樹

有本香

島田洋一

渡辺利夫

ほか

秘蔵グラビア28ページ

年表

安倍晋三の軌跡

世界を感動させた安倍総理の演説

安倍総理がつぶやいた3188日



月刊 花田紀凱責任編集  
**Hanada**

セレクション 永久保存版

# 安倍總理が問うた

渡辺利夫  
拓殖大学顧問



戦後とは何か

「戦後レジームからの脱却」が安倍晋三氏を語る場合の象徴的なキーワードである。だが、この表現の真意

指導者は、安倍氏の「戦後」の意味を、安倍氏が非業の死を遂げたいまであればこそ、再確認しておく必要があるのではないか。

日本は第二次大戦に敗北、G H Q

(連合国総司令部)の占領下におかれ

られた。約七年にわたりつづいたこの占領によって、日本の歴史や伝統が否定され、日本の価値の体系たる憲法が完全に書き換えられてしまった。

安倍氏の遺志を継いで次代を拓く

が、若い政治家や官僚、ジャーナリストたちの心の深部にまで伝わっていなかつたのではないか。そういう悔しさを安倍氏は最後まで抱えていたように思われる。

書き換えは国民の目からは完全に遮られた。

られたG H Q内部の密室でなされた。

昭和二十一年十一月末には、三十

項目にわたるG H Qの検閲指針が提示されて日本の言論は完全に封じ込められてしまった。

三十項目のうち最初の四項目は(1)連合国最高司令官(司令部)に対する批判(2)極東軍事裁判批判(3)連合国最高司令官が憲法を起草したことに対する批判(4)検閲制度への言及、で

# 動の現と北朝鮮 の即時括救出の 立致問題 — 12/1

どこまでも「闇政治家」だった

GHQによる新憲法草案の作成過程は完全に秘匿され、これを知った言論人が秘匿事項をメディアに発信することは執拗な検閲によって阻止され、発信停止を含む厳しい処分の対象となつた。

実はこのような言論封殺は、GHQの検閲方針発表に先立つ昭和二十一年十月に発出された一般命令文書、いわゆる「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」(WGIP)、

日本の自衛権否定という露骨な主権制限を含む「マッカーサー・ノート」と称される文書を原案とし、GHQがこれに調整を施して日本側に提示されたものが総司令部憲法草案である。これに抗う日本政府首脳案である。

ハーグ陸戦条約において、占領者は占領地の現行法律を尊重すべきことが規定され、米国も日本もこれに調印していたのだが、この重要な国際合意が顧みられることはなかつた。

GHQによる新憲法草案の作成過程は完全に秘匿され、これを知った言論人が秘匿事項をメディアに発信することは執拗な検閲によって阻止され、発信停止を含む厳しい処分の対象となつた。

この間、昭和二十一年五月から昭和二十三年十一月までの二年半に及んだ極東軍事裁判において、日本の戦争犯罪が十重二十重に積み上げられて、こちらのほうはその真偽が十分な検証を経ないままにGHQによって次々と発表されていった。このいわゆる「自虐史観」が日本のメディアを通じて広く国民に伝えられ、国民の心理に深甚なる影響を及ぼしたのである。

新聞をはじめとする日本のメディアは、GHQによる検閲の眼をはばかりのように黙したまま、いつの間にやらみずからが自虐史観の発信者へと変じていった。

しかし、である。不思議なことで

つまり“戦争への罪悪感を日本人に植え付けるための宣伝計画”をベースにしたものであつた。

はないか。日本は昭和二十六年九月八日にサンフランシスコ講和条約に

調印、翌年四月二十八日に条約が発効して、GHOの占領はここで終焉

もちろん検閲も廃止された。

であれば、GHO占領時代の言論封殺に対して、この時点で大いなる非難の声が噴出し、自立国家としての新しい言説の時代が開かれてもよかつたはずである。

だが、現実には日本のジャーナリズムはGHO製の憲法を「平和憲法」と称し、占領期間中の極東軍事裁判の過程で広がった自虐史観を今度はみずからが発信する側に回ってしまった。

時代はずっと下るが、平成三年になつて「朝日新聞」が流したいわゆる「従軍慰安婦問題」についてのフェイクニュースなどは、日本のジャーナリ

ズムが自虐史観をなお引きずつてきただことの証である。

## ナショナリスト・岸信介

サンフランシスコ講和条約と同時に日米安全保障条約が締結され、日本は米国の核の傘に守られて米国庇護のもとに厳しい極東アジア情勢のなかで生存していくことになった。憲法には一字の手も加えられていままであった。

かかる状態にありながらも、対米自立を少しでも進めたいと考えた日本の保守政治家、正真正銘のナショナリストが、安倍晋三氏の祖父の岸信介氏であった。岸氏は戦後日本のナショナリズムに命を賭した人物である。岸のナショナリズムの中核には自主憲法制定が据えられていた。

しかし、東西冷戦が深化するなかで、日本の米軍への基地貸与と米軍による日本防衛義務とが分かちがたく一体のものとしてバランスすることにより、日本の安全保障が担保され

ことになった。

この間、「専守防衛」「非核三原則」といった自立からむしろ遠ざかるようなスローガンが打ち出され、第九条改正をめざす自主憲法制定へのエネルギーが萎縮してしまった。日本

の憲法は発布以来七十五年間、まったく改正の手を加えられることのない世界でも稀有な存在なのである。改正反対ならこれと闘う術もあるが、改正へのエネルギーが消滅してしまつたのではどうにも手の打ちようがない。岸氏の無念は、幼い安倍晋三氏の胸の底に焼き付けられたのではないか。

岸氏の長女の洋子氏と結婚したのが安倍晋太郎氏であり、その子息の一人が晋三氏である。父の晋太郎氏は保守政治の中核につねに位置し、要職をいくつも経ながら、しかし総

理の座を直前にして六十七歳で死去した。父の弔い合戦のような気分で、晋三氏は保守政治の海を必死に泳いできたようにみえる。

## 闘う政治家として

安倍晋三といいう政治家の闘う姿勢を初めて垣間見せたのは、平成十四年、小泉純一郎内閣の官房副長官として首相の訪朝に同行、拉致被害者五人の一時帰国を実現させ、この一

時帰国した五人を北朝鮮に返すことには国家意思としてできないと断固主張し、事をそのように運ばせた時であった。

しかし、闘争心はしばしば周りの者たちを辟易させる。闘争心を包み隠すものが、氏のあの明朗なキャラクターであろう。

七年八カ月にも及ぶ憲政史上最長の政権を氏に担わせたものは、何よりも安全保障政策の確立であった。限定期ではあれ集団的自衛権を容認する安保法制の整備は、私のみると

時代は変わったが、わたしは政治家を見るとき、こんな見方をしていい。それは「闘う政治家」と「闘わない政治家」である。

ころ氏の最大の政治的成果である。

ロシアによるウクライナへの侵攻は「力の空白」こそが専制国家を招き寄せる最大の要因であることを証し、

中国による台湾侵攻の可能性をリアルなものとして私どもに実感させている。中国による台湾侵攻には米軍がこれに応じ、日本は事態を「重要影響」だと判断すれば米軍の「後方支援」を、「存立危機」と判断すれば集団的自衛権にもとづく武力行使を、という道が安保法制によつて初めて開かれたのである。

ジャーナリズムと野党の徹底的な反対を押し切つて通過させた法案であり、実際、これにより安倍政権の支持率は大きく低下した。

しかし、もしあの時点で安全保障法制が成立していなかつたとすれ

ば、現在の日本はロシアのウクライナ侵攻後のきわどい極東アジア情勢のなかで右往左往していたにちがいはない。「闘う政治家」としての真骨頂は、実際に氏の首相退任後に立証されたのである。

憲法改正とりわけ第九条への自衛隊明記など、自立国家への必須の改定は未完のままに終わってしまった。無念だったにちがいない。

## 最後のチャンス

過日の参院選で改憲勢力が三分の一を超える。衆院を合わせて両院でも三分の二を上回る。しかも、よほど

のことがない限り、今後三年間、大型の国政選挙はない。日本の「戦後レジーム」脱却の最後のチャンスなのである。

日本人的安全神話も耐用年数を超えたのかもしれない。

日本人の安全保障観の危うさを感じさせる事件でもあつた。

先ほど「異様な執念で他者に歯向

かう人間はたしかにこの社会には存在する」と書いた。『異様な執念で他

氏は命を落とさねばならなかつたのか。

異様な執念で他者に歯向かう人間は、たしかにこの社会には存在する。

そういう前提で警護・警備がなされてきたのである。しかし、事件の翌日の記者会見で奈良県の県警本部長が、「今回の警護・警備に問題があつたことは否定できない、責任を痛感する」と語った。史上最長政権を築いた元総理を守り切れなかつたのである。

日本の「安全神話」も耐用年数を超えたのかもしれない。

日本人の安全保障観の危うさを感じさせる事件でもあつた。

先ほど「異様な執念で他者に歯向かう人間はたしかにこの社会には存在する」と書いた。『異様な執念で他

界には存在する"ことも事実である。だからこそ特定秘密保護法という危機回避のための情報収集メカニズム、安全保障関連法案による集団的自衛権行使への道を開くための法案が不可欠なのである。

二度の大戦での敗北のトラウマを  
引きずってきたドイツさえ、ロシア  
のウクライナ侵攻を機に国防政策を  
大きく転換して、ついに「戦後」を脱  
却した。

日本は三流国家になるわけにはいかない。

日本を二流国家にするな

安倍元首相の衝撃的な死去のニュース

て国家として決して欠かしてはならないこのことを訴えた、そういう事件であつたとも思わされる。

抜いてきたものの、NATO（北大西洋条約機構）は非同盟国を助けにきてはくれないことを改めて認識させられて同盟条約に参加することに決し、そうして「戦後」を一挙に脱却することができた。

わたなべ としお  
一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長を歴任。八五年、「成長のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経細胞の時代」で開高健賞受賞受賞。

元党员が命がけで内部告発した、党史研究の最高傑作！

日本共産党  
暗黒の百年史

元文臣が奉公だけで内閣侍従、  
文化研究の最高課長。  
ソ連、中国、自国民、天皇、私金——  
こと豊富がやってきたこと。  
やううとしていることがわかつてなかれ。

ISBN978-4-86410-912-3

# 日本共産党 完全書き下ろし 暗黒の百年史

## 松崎いたる

◎ 飛鳥新社

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-3  
光文社ビル2F  
TEL 03-3263-7770 / FAX 03-3239-7759